

氏 名 松宮 貴之

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大乙第262号

学位授与の日付 2020年3月24日

学位授与の要件 学位規則第6条第2項該当

学位論文題目 近現代中国の「経世致用」思想と書法への展開—郭沫若を中心として

論文審査委員 主 査 教授 稲賀 繁美

教授 伊東 貴之

教授 劉 建輝

教授 長尾 秀則

佛教大学 文学部

教授 劉 岸偉

東京工業大学リベラルアーツ研究教育院

(様式3)

## 博士論文の要旨

氏名 松宮 貴之

論文題目 近現代中国の「経世致用」思想と書法への展開—郭沫若を中心として

### 東アジア文化史と書

東アジアの文化史に於いて、日本、朝鮮半島、中国は、常に緊密な文化の交流が行われている。遅くとも漢代には、日中の文化の行き来は確認でき、それは、儒教、仏教等の吸収過程からも大まかに推察できる。日本に於いて中国からの文化の摂取は、その時代の環境、時代情勢によって、それぞれの民族特有の形で、変化して受容された。その流れの中で、古代から近現代までの歴史上の人物の「書」に現れる「思想」を、時代、地域、文化等のそれぞれの背景のもとに解き明かすことも可能であろう。

基本的には、中国から日本へという流れが近世までの主な潮流であるが、近代からはその潮流は底流として保守されながらも、西洋文化の受容と言う文脈で、日本から中国へと逆流を見せ、帝国日本は中国革命の拠点的な地として、その文化的な葛藤の場として機能していた。その実態は、明治からの北京、東京の帝都政権外交ルート、また江戸以来の所謂「近代東アジアのモダンロード」、広州、上海、長崎、神戸、横浜ルートによって、中国の旧文化と共に、新文化も日本に経済的側面と共に流入して、相互に影響しその拮抗の中で、淘汰されていく変貌の時代であったとも観念できる。

### 日中二百年と西洋化する書と書論

つまり、中国、また東アジアが「近代」を迎える約200年前から、急激な西洋化が始まったのである。

その影響は中国の政治思想をも変容し、その経学が様変わりしていくが、それと共振するように書、書論も変貌を遂げることになる。

本論では、特にその経世致用の政治思想が書論に現れるのを清の道光期の阮元の北碑南帖論と仮定し、その民本主義にスポットを当てることから、稿を起こした。

そしてその思想を受けたものが、中国から亡命、留学し、日本という場に於いて、さらにその実学思想を促進させ、康有為、孫文、楊守敬、王国維、羅振玉、蒋介石などが、様々な書の華を開花させた。

中でも、彼らよりひと世代後になるが、後の中華人民共和国の指導的な立場を取るようになる郭沫若を、本論中盤からの骨子として、そのモデルとして取り上げた。

先ずここでは、道光期からの北南帖論の流れから、書道思想を3つに類型化し、進歩派の碑学派、保守派の帖学派、超進歩派の共産党員の書とし、それぞれの潮流を、政治思想史的に分析した。

### 在日時代から抗日戦までの郭沫若の学問と書法

その潮流の中で、郭沫若の書を位置付けし、郭沫若の留学、亡命時代において、日本に於いてどの様な影響を学芸共に受けたかを分析する。

留学期の書の作品は管見では、ほとんど残されてはいないが、その当時、思想的には陽明学の

影響を受けていることは、残された史料から相違なからう。

そして北伐に伴い、中国に帰国するも、蒋介石との決別によって思想が、決定的に変化し、渡ソ連を断念し、再度日本に亡命。西洋思想のマルクス主義による歴史、甲骨金文研究に専心、また日本の左翼人士と交流し、日本の警視庁の監視下に置かれた。

ここで当時の蒋介石思想批判、唯物歴史学、文字学についても少しく分析を加えた。

特に周易の解釈、甲骨文「辛」字解釈を中心に論究し、殷代の奴隷制社会についての歴史哲学を確認した。またその当時に残した書が、東京三鷹のアジアアフリカ図書館に所蔵されており、その書と書学についても論述する。

その後日中戦争の勃発に伴い再度帰国、抗日文化宣伝の責任者として、その書の持つ意味も、単なる趣味ではなく、「経世致用」の政治的役割を担い、所謂プロパガンダ化し、第一次郭体を形成する。

つまり、本稿で定義した「郭体」とは、単なる中華貴族の文人趣味としてではなく、書に「経世致用」の役割を担わせるようになった時期から、観念を始めたものであり、その前後の線で明確に峻別したことを断っておきたい。

そして、その第一期郭体とは、旧文化(文語)への白話体の導入と位置付けられよう。つまり中華民族にとっての文化の生命線を、日本など周辺諸国の漢文とは一線を画し、郭沫若は白話に求めていたとも解せられる。

#### **解放後から大躍進政策までの書の在処**

郭沫若は日中戦争終結、国共内戦を経て中華人民共和国の要職に就き、文化行政のリーダーとなって、文字言語政策を主導。当時の書はその模索ぶりを顕著に表す多様な実験作が多い。

そして1955年、その政策が一区切りをつき、百花斉放時代に突入する。その当時の書は、学術の復興と芸術としての書を謳歌するか如く、抗日戦争以前の文語体の書風が盛り込まれ、裂帛の気迫と伸縮を伴う爆発的なエネルギーを放出する第二期郭体を形成した。ここで、抗日戦からの周恩来との影響関係についても言及する。

しかし、その後の反右闘争に伴い、エネルギーが衰え、その書風はややおとなしい、白話体書風に少しく揺れ戻った第三期郭体へと変遷する。その頃、大躍進政策に伴う視察の中で、中国各地にその書を残すことになる。

ここまでの書法の文脈では、文語と白話、右派と左派の振り子ではほぼ解説できる。

#### **社会主義運動から文革、そして晩年に於ける書の変貌**

1963年の満江虹詞の発表以降、孤立する国際情勢の中で、ナショナリズム、また毛沢東の復権を後押しするような作品が多作され、詩より詞が増える道程の中で、再度エネルギーの溢れる第四期郭体へと姿を変えて、文革へと突入する。

ここからは、郭沫若の書は、旧文化、旧詩の在処を求めて、文語、白話の振り子運動と言うよりも、なりふり構わず、より派手で象徴的な左派プロパガンダとしての生き残りの書として邁進する。またまた些か専門的で見解の分かれる点であるが、碑石学派の発展と、金石学の西洋考古学との接触にともなう変質の中で、郭沫若をいかに位置付けるか、また古典として賞玩されてきた王羲之『蘭亭序』などの諸写本の位置づけに関する論争に、郭がいかに関与し、そこにはいかなる政治的・時代的背景が潜在していたか等の論点からも考察を加えた。

その後文革に至り郭沫若は、詩の制作を辞め、毛沢東の得意とする詞の制作は続けるが、その書風も毛沢東風の狂草体、所謂文革期書風(第五期)へと移るが、その書が残されるのは、文革初

期のもののみで、文革中後期の書は、詞の存在と裏腹に姿を消す。そして文革終結後、また詩と共に姿を現わすが、それは、エネルギーの衰えた、素朴な第六期郭体と言えるだろう。

最晩年1970年代の第七期の書風は、日中の和平の使者、外交官としての最後の書風だったと言えるのではなかろうか。そういう意味で、郭沫若の書は、抗日戦からその最期にいたるまで、「経世致用」の書であり、「近代」から継承された最後の文人の書と言えよう。

### **最後の文人、郭沫若**

また書を、実学、経世致用、政治に用いた象徴的な存在が、この郭沫若だったと言える。

そして現代中国の書法は、経世致用から国学的な伝統文化、また芸術へとすでに移行し、人民へのサービスとして次の在処を求めている。

近現代中国の「経世致用」思想と書法の展開を最も具に一覧でき、その時代時代の影響を強く受けた郭沫若の書法を中心に、本論では日中文化交流史を踏まえた東アジアの「近現代の書の変貌」として鳥瞰する。

- (備考) 1. 和文で作成する場合は 2,000 字～3,000 字, 英文で作成する場合は 700 語～2,000 語程度で作成すること。
2. 用紙の大きさは、日本工業規格 A4 縦型とすること。

## 博士論文審査結果

氏名 松宮 貴之

論文題目 近現代中国の「経世致用」思想と書法への展開—郭沫若を中心として

郭沫若(1892-1978)は、近現代中国を代表する文化人、政治家であり、とりわけ日本との関係も深い。郭は東京の第一高等学校予科を経て、岡山の第六高等学校に入学、1918年には九州帝国大学医科大学に進む。1921年に留学仲間の郁達夫、成仿吾らと文学団体「創造社」を結成し、同年最初の詩集『女神』を出版、1923年に大学卒業後に帰国。1926年に発表した「革命与文学」は、中国における革命文学の嚆矢と評される。北伐時には国民革命軍総政治部秘書長として参画するが、1927年、4.12上海クーデタ後、蒋介石との関係悪化から日本に亡命。1937年盧溝橋事件に際して単身帰国。日本敗戦後1947年には香港において国共内戦に反対する運動の先頭にたつが、解放後は中華人民共和国の建国に参加し、副総理、中国科学院初代院長、全人代常務副委員長などの要職を歴任する傍ら、学術上、文芸上も多くの業績を残した。1963年には中日友好協会名誉会長にも任命されている。

本博士号申請論文は、このように、中日関係史において看過すべからざる足跡をのこした郭沫若の思想遍歴を、書家としての実践との関係において掘り下げる。郭沫若の独特の書体は「郭体」の名称で知られ、北京駅正面の駅名表示や、中国銀行の表記をはじめ、各地の弁公室に今なお多数の扁額が飾られており、郭の公人としての地位を裏書きしている。その郭に焦点を当てた本論文には、まず書の研究の分野での顕著な成果として以下を指摘できる。

①従来「郭体」と一括表記されてきたその書体を7期に分け、そこに白話体と文語との競合という特徴を認めるとともに、これを基準として、「郭体」と時代や世相の変遷との関連を明らかにした。この分析は中国の学会においても高い評価を獲得した。②この字体の展開を、郭沫若の学術上の業績、とりわけ金石学の専門家としての見識に結び付けた。③さらにこうした郭の学識および実践を18世紀後半に遡る文字学の系譜と有機的に統合した。具体的には碑文に刻まれた文字を重視する「碑学派」と紙媒体に墨筆で残される筆触に注目する「帖学派」との学説史上の対立だが、本論文は阮元(1764-1849)の「北碑南帖」さらには「貶南尚北」という価値観が、清朝支配への隠れた抵抗の隠喩となっているとする松村茂樹氏の説ほかを援用し、それが郭の思想的骨格をなす「経世致用」と接続することを解明した。

この過程でさらに本論文は、郭沫若にいたる「書を通じた思想史」を有機的に浮かび上がらせる。すなわち①包世臣(1775-1855)、沈曾植(1850-1922)から康有為(1857-1927)、梁啓超(1873-1929)を経て、日本への亡命経験のある羅振玉(1866-1940)、王国維(1877-1927)あるいは中国哲学を基礎づけた胡適(1891-1962)へと至る歴代の思想家の書の系譜のうえに郭沫若を位置づける。とりわけ郭の胡適批判は、中国思想の近代化の屈曲を際

立たせる。②とともに林則徐（1785-1850）、曾国藩（1811-1872）、李鴻章（1828-1901）、黎庶昌（1838-1897）、吳汝綸（1840-1903）から「満洲國」初代国務院総理を務めた鄭孝胥（1860-1938）に至る政治家・外交官たちを取り上げ、かれらの日本との関わり（日下部鳴鶴、副島種臣、森槐南、清浦奎吾、宮島誠一郎、犬養毅ほか）にも適切に言及しつつ、書の内容および書体分析を通じて、かれらの政治思想を摘出し、その後の日本留学組の政治姿勢との異同を詳らかにした。③さらに続く世代の齊白石（1863-1957）、中国共産党創設に関与した陳独秀（1879-1942）、魯迅（1881-1936）を経て、郭とも盟友であった郁達夫（1896-1945）らによる白話体の導入に伴う価値観の転換を、字体との関わりから詳細に解明している。

以上の準備のうえで本論文は郭沫若の思想形成とその変遷に踏み込む。ここでの成果は以下の3点に要約できよう。①郭が日本留学期にゲーテを参照することから孔子に政治家としての側面を認める一方、スピノザの「唯心論」を参照しつつ王陽明に汎神論的傾向を認めたとの学説を具体的に検証したこと。②陽明学への接近によって宋の儒学を一蹴する一方、蒋介石（1887-1975）と思想的に親和性を帯びていた郭が、市川在住の間に唯物論への傾きを強め、③最終的には「修身齐家治國天下」をペテン（「騙局」）、蒋介石の「正中主義」を「資産階級革命」とみて、これと決別するに至る思想的な道筋を明確に摘出したこと。

民国抗日期以降に関し、本論文は郭沫若の詩作の全貌復元を、残された作品から試みる。とともに先行研究を批判的に参照しつつ、白話文草稿を含めた残存筆跡を根拠に、時代別の字体分析を提唱する。とりわけ「新詩」と「旧詩」での字体の使い分け、文語の古詩筆写における音韻意識、平仄と字体との連関、詩・詞の内容と筆跡との競合、署名字体の変化などの分析は、古典と現代中国語に通じた書家たる論文執筆者ならではの力量を発揮している。

以下、審査委員会の講評を総括する。本論文後半は光復・解放後から、百花齊放・百家争鳴、反右派闘争、大躍進時代とその失敗、毛沢東の復権から文化大革命期、さらに郭の晩年へと議論を進める。世相の変転に伴う書風の変貌は、中国現代史の奔流を乗り切ったひとりの人物の軌跡を、説得力ある形で立証した。そこには文革期の批判をも躲した処世術、「両刀使い」や「玉虫色の模糊」たる様相も的確に指摘された。かくして本論文は「もっとも見事に世相を体現した」一個人の筆跡を通して、現代中国の思想闘争の現場再生に成功した。だが激動する歴史を一身に体現する郭沫若ひとりに分析対象を限定すると、却って書と歴史との間の矛盾や亀裂には踏み込み得なくなる。それを補完するには、別途の比較対照軸を立てる必要が生じる。具体的には①文革の犠牲となった二人の息子の去就、②政治的思惑から破棄されたものと推測される詩作や揮毫、③王羲之の「蘭亭序」を郭沫若が智永による偽作と断じた学説の時局的な政治性などの論点である。いずれも本論文に論及はあり、さらなる展開の可能性が残る。だがこの点を深めるのは、別途の企画となろう。本論文の立論上の限定は、申請者の意図的方法論上の選択であり、本論文の貢献を損なうものではない。

最後に、審査委員からは、複製図版に見られる漢字解読の細部に異見が呈され、また中国語原文の解釈についても、申請者と審査員とで、立場上、見解が分かれる箇所も残った。

「郭体」分析についても、既存の専門用語との異同、中日両国での術語の不一致へのさら

なる配慮が要請された。また肉筆の書と全集での活字製版との異同、繁体字と簡体字の混在、横書きと縦書きの文書変換上の支障ほか、既存刊行物の本文校訂の不備に由来する不整合、出典注、周辺の先行研究への言及、章立てを含む文章表記などに、なお残る技術的な留意点が指摘された。しかしこれらはいずれも、書籍としての刊行時には是正されるべき編集上の課題であり、本論文の達成した成果および学術上の新知見を損なうものではない。また本論文は、主題および方法論において、「国際性」「学際性」「総合性」を標榜する「国際日本研究専攻」の主旨に合致しており、論文博士の学位授与に適切な業績と判断された。以上により審査委員会は全員一致で、本論文を博士号(学術)に相応しいものと認定した。